



12.

ファンクショナルブレースを用いた上腕骨骨幹部骨折の治療(第72回岐阜県整形外科集談会)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-07-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 俊之, 上村, 修一, 小原, 明, 若原, 和彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/12520

り、特に90歳以上の超高齢者の症例数が著明に上昇していた。症例数の季節変動は認めなかった。受傷場所は介護老人施設での受傷が増加傾向にあった。ADLは骨折前は90%が歩行可能であったが1年後は61%に低下していた。1年後の死亡率は11%であった。生存例においては約4割が1年後ADLの低下をきたしていた。ADL低下例では骨折前に何らかの介助を必要としていた症例のADL低下率が高かった。【まとめ】症例数の著しい増加と患者の高齢化の進行を認めた。術後ADLに影響を及ぼす因子の1つとして骨折前ADLが考えられた。

10. 大腿骨頸部骨折における術前後の凝固系因子の変化

朝日大学附属村上記念病院 整形外科

福井康人, 日下義章, 大友克之, 塚原隆司,
今泉佳宣, 藤原靖大, 植村 理, 杉之下武彦,
小見山洋人, 小椋明子

愛生会 山科病院

平田哲朗

大腿骨頸部骨折に対する術式の違いが、術前後の凝固系因子の変化、および術後の下肢腫脹に与える影響を検討した。70歳以上の大腿骨頸部骨折24例で男性2例、女性22例で平均87.2歳であった。術式はセメントレス人工骨頭置換術 (BHP) 6例、Compression Hip Screw (CHS) 9例、Proximal Femoral Nail (PFN) 9例でCHSとPFNは無作為に術式を選択した。凝固・線溶系についてPT, APTT, フィブリノーゲン, AT-III, D-dimerを手術前と直後に測定し、術後の増加率を%で評価した。下肢腫脹は術後の下腿周径最大値と術前値の差を評価した。D-dimerに関してのみすべての術式間で有異差を認めBHP, PFN, CHSの順で高かった。術後の下腿周径の差も同様にBHP, PFN, CHSの順で大きかった。このことから術後のDVTの危険性はBHP, PFN, CHSの順で高いと考える。

11. 上腕骨 Bipolar 型人工骨頭の使用経験

岐阜市民病院 整形外科

杉谷茂樹, 高津敏郎, 石川裕志, 土岐 玄,
加藤充孝, 中川偉文, 河田好泰

上腕骨 Bipolar 型人工骨頭置換術3例4肩の短期成績を報告した。1例は68歳女性の cuff arthropathy で腱板の広範欠損のある症例で、術後疼痛は消失した。1例は70歳男性の末期 RA の両肩で、やはり腱板はほぼ消失している。白蓋側のびらん性変化が著明で、左側の痛みは改善したが、右側は残存した。あまりに骨変化が著しく適合性、支持性に問題があった。1例は脱臼後の関節症で、初回手術後数日で再脱臼し、再手術にて靭帯再建を追加した。結局再脱臼はなく疼痛は軽快したが、関節拘縮が残存している。術前の不安定性の評価が重要であった。あくまで salvage operation と考えると、機能的改善は多くは得られていないが除痛に関しては有用な方法であ

り、患者の満足度は高いといえる。さらに経験を積み重ねて、適応や評価を確立したいと考えている。

12. ファンクショナルブレースを用いた上腕骨骨幹部骨折の治療

松波総合病院 整形外科

井上俊之, 上村修一, 小原 明, 若原和彦

上腕骨骨幹部骨折にたいして最近では手術的に治療されることも多い。今回我々はファンクショナルブレースをもちいて保存的治療を行い、良好な結果を得たので報告する。症例は男性3例、女性2例の5例。年齢が23歳から89歳と多岐に渡り、男性3例、女性2例であった。治療後、肩関節の可動域は1例を除き良好だった。肘関節の可動域制限は残らなかった。ファンクショナルブレース法は1977年、sarmientoらによって紹介され、その方法は水圧理論に基づくもので、関節運動によって上腕筋群の容量が増大し骨折部を圧迫固定することで、骨癒合を促進する機能的装具療法である。適応としては、転位の軽度のもの、閉鎖性骨折、神経・血管損傷を合併しないもの、治療に協力を得られることなどが挙げられる。結語、今回治療した全例に骨癒合をえられ、良好な結果であった。ファンクショナルブレース法は適応を選べば優れた方法であると考えた。

13. 非外傷性大腿ガス壊疽の1例

岐北総合病院 整形外科

福田章二, 有本利恵子, 下地昭昌

海津郡医師会病院 整形外科

山本啓二

岐北総合病院 内科

河瀬晴彦

症例は69歳、女性。既往歴は糖尿病と関節リウマチである。一週間ほど左膝の腫脹がみられ、平成14年4月11日意識レベルが低下した。当院初診時、左鼠径部より大腿周囲にかけて捻髪音を伴う発赤・腫脹を認めた。単純X線写真で大腿皮下にガス像がみられ、明らかな外傷歴は認めず、非外傷性ガス壊疽と診断した。入院翌日にはさらに意識レベルの低下があり、敗血症ショックによる全身状態不良のため、局所麻酔下にて病巣郭清術を行った。膿・血液培養では E.coli, Enterococcus, Klebsiella pneumoniae, α -streptococcus のほか、菌種の同定には至らないものの、嫌気性グラム陽性桿菌が検出された。抗菌剤の投与のほか、創部を開放創として毎日3.5リットルの生食で洗浄を継続したところ、炎症所見は著明に改善し、全身状態も回復した。その後、遊離皮膚移植を経て現在まで炎症の再燃は見られない。

14. 血行再建を要した母指損傷の2例

中津川市民病院 整形外科

日比野守道, 近藤喜久雄, 矢野順治, 櫻井智浩
外傷性母指欠損では、たとえ他の四指に全く損傷がな